アートペーパー 75
ART PAPER 名古屋市美術館ニュース 2007年秋号（季刊）
Nagoya City Art Museum

特集

二人の画家による女性像をめぐって

日本と西洋、二人の画家

渡辺幾春は1895（明治28）年名古屋に生まれ、郷土の画家水谷芳年に師事した後、京都に出て山元春挙に師事し、1922（大正11）年に京都市立絵画専門学校に入学。その後、朝見香城や喜多村麦子といった画家たちと「中京美術院」を創設し、東京と名古屋で活躍した。常に清楚で気品のある女性像を描いた、この地方を代表する美人画家といえる。

一方、1862年にウィーンで生まれたグスタフ・クリムトはウィーン工芸学校に学び、当初、ウィーンの都市改造に伴って建設された建物の天井画などを描いて世に出たが、1897年にウィーン分離派を設立。旧態依然としたウィーンの美術界からの分離を宣言した。金を多用したきらびやかな作風で、様々な女性像を描き出した。

この二人の画家は、全く異なった作風を持っているが、どちらも多くの女性像を描き出したことで共通している。ここでは二人の画家が描いた幾つかの女性像を採り上げながら、女性像の背後にあるものや、その変化を見ていきたい。

渡辺幾春《蓄音機》1933年

渡辺幾春《若き女》1922年

渡辺幾春の描く女性像

渡辺幾春が描いた《蓄音機》という作品には、蓄音機を前にして座り、流れてくる音楽に耳を傾ける女性の姿が描き出されている。きちんと着物を着て、背筋を伸ばして座るその姿は、端正で理知的な表情を持っているのだが、その雰囲気はこの絵全体に漂っており、はっきりした輪郭線や単純明快な構図、抑え目の色調など、全てがこの作品を静謐で整った、理性的な世界へと導いている。流れている音楽は何だろうと想像してみるのだが、それは、この女性の持つ雰囲気や画面全体の空気とオーバーラップしてくる。いちばん相応しいのはバッハではないか、という気がしてくる。秩序正しく理性的で、心静かに聴き入ることのできる音楽が想起される。この作品は1933（昭和８）年に描かれた。

一方、同じ渡辺幾春の《若き女》では、絞りの着物を着て浮世絵を前に座る女性が描かれる。彼女は《蓄音機》の女性よりもリラックスしたポーズをとり、何か物思いに耽っているような表情をしている。全体に柔らかなタッチで描かれており、叙情的でロマンティックなムードが漂っている。この絵が描かれたのは1922（大正11）年である。

名古屋市美術館で1997年に開かれた展覧会「郷土の美人画考」では、この二つの作品が出品された。そのカタログの中で吉田俊英氏はこれらの作品を比較して《若き女》は「感性の時代」を、《蓄音機》は「理性の時代」を背負っていると述べている。彼は、《若き女》には、「象徴性・神秘性などやや内面的、精神的なものが感ぜられ、画面もややぼかし気味で深く重く作ろうとしているところがある。また、着物や体、浮世絵の紙などの質感や細部に執拗にこだわりながら、画面の奥に憂い、夢、あこがれ、妄想など複雑な心理の綾を張りめぐらし、人間の本質を見据えようとする。」と、そして《蓄音機》は「明快で簡潔な作風であり、従って画面作りも、明るい色彩と大胆に選びとられた線描により単純化された形態が心地よささえ誘う。つまり画面構成にこだわり、事物の色彩や形態を整理しようとするのである。」としている。

このように、一人の画家が描いたものでありながら、二つの作品に描き出された女性像は、全く異なった様相を見せている。竹久夢二に代表されるような大正ロマンの時代から、やがて戦争へと突き進んでいく昭和の時代へと移り変わっていく中で、画家の眼に映る女性像も変化していくことがわかる。「感性の時代」から「理性の時代」への大きな転換が、画家の眼、そして絵筆を通して確かに捉えられているのである。

グスタフ・クリムトの描く女性像

さて、このような女性像の変化を思うとき、《蓄音機》と同様に音楽を題材とした作品として挙げられるのがウィーン世紀末の画家グスタフ・クリムトが描いた《音楽Ⅰ》（1895年）、《音楽Ⅱ》（1898年）である。この二つの作品には、同じモティーフが描かれている。キターラと呼ばれる竪琴を奏でる女性、そして、シレノスの仮面、スフィンクス、葡萄の房である。キターラを奏でる女性像は、《音楽Ⅰ》と《音楽Ⅱ》で大きく異なった印象を与える。《音楽Ⅰ》で俯きかげんでキターラを奏でる女性は、まだ少女のようなあどけなさを残し、清楚でかわいらしい印象を与える。一方、《音楽Ⅱ》の女性は動きのあるポーズで描かれ、こちらに向かってやや挑発的とも取れる視線を

アートの旅「過去・現在・未来」

（彫刻家・名古屋市美術館参与）
石黒 鏘二

寡黙の時　第三話
化け物集団ではなかった。

えらいところへ入ってしまった。昭和二十九年、東京芸術大学彫刻科石井鶴三教室というところへ私は入学した。当時の芸大は教室制度であり、彫刻科にはもう一つの教室があったが、一旦一方に入学すると卒業まで一切の交流はない。一教室十人そこそこのくせに、私はもう一つの教室に誰がいたか、結局名前さえ知らずに卒業した。

とにかく、やたら怖い教室であった。入学前、田舎者の私には、この二つの教室の違いを選別する能力はなかった。気が付いたらそこにいた。そして、そのことでその後の人生が色分けされ、決まるのだとは全く考えもしなかった。私は一瞬にして洗脳された。事実、入学と同時に相手教室は私の中で無視され、その後それらを一度も彫刻科と意識したことはなかった。勿論、口もきいたこともないし、その周辺に出掛けたこともない。ひょっとすると、その意識は今でもそのままかもしれない。

私にとって、東京芸大は石井教室が全てであり、それ以外の一切を知らないし記憶にもない。先生は神のごとく絶対であった。先生が一旦、赤と言えば赤なのである。不思議に思われるであろうが、彫刻科でありながら形をつくると叱られるのであった。つくらないでつくれと言う。黙して語らず見ることだ。私は毎日、人声一つない息詰まるような緊張感しかない寡黙な空間で怯えていた。えらいところへ入ってしまった。

とにかく、やたら怖いのであった。ある日石井先生は、にこにこされながら院展を観にいくわれわれにご一緒された。丁度、平櫛田中が途轍もない木彫の大作「歌舞伎役者の像」を、十数人で汗水たらし運び込んでいるところであった。その時であった。先生と田中は至近距離にあり、もっとも効果的頃合であった。先生はわれわれに向かい一言されたのである。「これが彫刻ですかねー」と、温厚で晴れやかないつもの表情で。

そんな教室でのモデルさんたちも徹底していた。ある日、先生の儀式に立ち合う関係からか、全員がアトリエからかなりの時間いなくなった。やがて戻って驚いた。モデルさんは時間どおり微動だにせず一人ポーズしつづけていた。ある時緊張からか、若いモデルがストーブめがけ倒れ込んだ。咄嗟に数人が駆け寄り、その数日後彼女を見舞うためのカンパ袋が回されてきた。化け物集団ではなかった。

時の話題

「R100、再生紙の話」

今ご覧いただいている「アート・ペーパー」を始め、名古屋市美術館で作成するポスターやちらしには、「R」の後ろに数字のついたマークが入っています。このマークは、古紙パルプがどのくらい再生利用（リサイクル）されているのかを示すもので、たとえば数字の「100」は、古紙パルプ配合率100％を表しています。名古屋市では、環境にやさしい商品を市が優先的に購入する「グリーン購入」にも取り組んでおり、その「ガイドライン」の中で、印刷物に使用する用紙の古紙パルプ配合率が指定されています。名古屋市美術館でもこのガイドラインに基づき、従来からR100の製品を使用してきました。

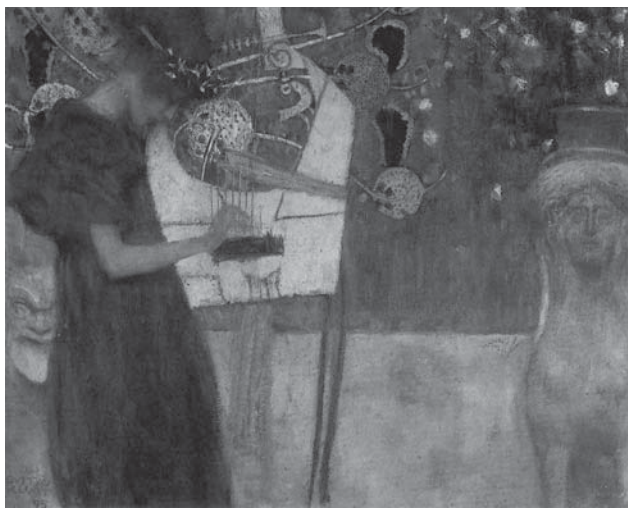
先日、神戸にある兵庫県立美術館を訪れ、「河口龍夫ー見えないものと見えるもの」の広報用のポスターやちらし等のデザインについて打ち合わせをした時、両館同時開催という大変珍しいケースであることから、同一のデザインをということになりました。この打ち合わせで、名古屋市のR100の用紙指定のことに話が及び、作家とデザイナーから、展覧会用のポスターを“再利用”できるようにデザインしようという提案がありました。そして、それぞれの美術館のデザインを確保しながら出来上がったのが、B2両面刷りのポスターです。

こうした一連の作業を行っている時に、「名古屋市グリーン購入ガイドライン」の再生紙の購入基準が改正されました。国のグリーン調達基本方針の変更に準じるもので、印刷物については、それまでの「古紙パルプ配合率100％」が「古紙パルプ配合率70％以上」に変更されました。背景には、世界レベルの古紙需要の変化など、古紙の安定的な調達が困難な状況もあり、大手製紙メーカーでも古紙パルプ配合率100％製品の生産を中止することがあるようです。

今回の展覧会のポスターやちらしの用紙については、メーカーに話をして何とか古紙パルプ配合率100％のものを入手できました。

それにしても、かつての“大量生産・大量消費”時代の反動（或いは反省）と地球環境の保全を目的とした「リサイクル」運動においても、再生すべき資源が不足するとは。展覧会を通じて、改めて環境問題の難しさと重要さを再認識させられました。

さて、“再利用できる”ポスターのデザインについては、ぜひご来館の上、会場でご覧頂けたらと思います。



グスタフ・クリムト《音楽Ⅰ》1895年

グスタフ・クリムト《音楽Ⅱ》1898年

投げかける。彼女は19世紀末にしばしば題材とされた「ファム・ファタール(宿命の女)」の雰囲気を宿しているといえそうである。シレノスの仮面、スフィンクス、葡萄の房は、ディオニュソス的な本能の力を象徴するものともされるが、それらのモティーフが《音楽Ⅰ》ではやや控えめに画面の端に描かれている。《音楽Ⅱ》では、それらがより存在を主張する形で描かれ、「ファム・ファタール」的な女性像とともに、本能やエロス、欲望といったものを露わにしている。

ディオニュソスは古代ギリシアの神であり、豊穣とぶどう酒の神とされている。恍惚の境地に入る祭儀を伴って崇拝された。フリードリヒ・ニーチェはその著作『悲劇の誕生』(1872年)において「アポロン的」および「ディオニュソス的」という美学上の対立概念を設け、夢想的・静観的芸術をアポロン型の芸術、陶酔的・激情的芸術をディオニュソス的芸術と名付けて、両者の総合がギリシャ悲劇であるとしている。クリムトがニーチェの影響をどの程度受けていたか定かではないが、ディオニュソスの持つ本能の露わとなる恍惚の境地をその作品の中に取り込んでいたことは考えられ、《音楽Ⅰ》、《音楽Ⅱ》にディオニュソスを象徴するモティーフが現れるということは、彼が音楽をそのような本能の力を呼び起こすものとして捉えていたことを予測させる。

ここでもやはり、《蓄音機》の場合と同様に、絵画から聴こえてくる音楽は女性像とオーバーラップする。《音楽Ⅰ》の画面からは、サティやドビュッシーなど静かで優しげな音楽が想起される。そして《音楽Ⅱ》からは、マーラーやリヒャルト・シュトラウスのように、うねるような旋律をともなった豪奢な音楽が想起される。理性を感じさせる画面から官能性を感じさせる画面への変化は、そのまま想起される音楽に反映してくる。

ファム・ファタール(宿命の女)と世紀末ウィーン

《音楽Ⅱ》に登場する女性像の「ファム・ファタール」的な雰囲気は、クリムトの他の作品の中にも見られる。クリムトは、聖書の中に登場するユダヤの女性ユーディットを「ファム・ファタール」の典型として描いている。ユーディットはネブカドネザル王の総大将ホロフェルネスの率いるアッシリア軍に包囲された町ベトゥリアを救うために着飾ってホロフェルネスを訪れる。そしてホロフェルネスが彼女を誘惑しようと開いた祝宴の後、酔いつぶれた彼の首を斬り落とし、これによって、イスラエルは危機を脱することとなる。この女性を画家たちはしばしば題材にしてきた。クラーナハやボッティチェリなども彼女を採り上げている。

このユーディットは極端な例ではあるが、そこに象徴的に見られるように、「ファム・ファタール」とは、ある意味、残酷な女性である。しかし画家たちがしばしばそのような女性をテーマとして採り上げているのは、そこに何らかの魅力を見出しているためでもあるだろう。クリムトはさまざまな女性を描いたが、常に女性というものの中にある秘めた部分を捉えようとしていたように思える。そこでクリムトが捉えた女性のひとつの在り方が、「ファム・ファタール」なのであろう。しかしながら同じ女性から見て、「ファム・ファタール」は幸せな女性とは思えないし、女性の中にこのような部分があるとすることには抵抗も感じる。クリムトがきらびやかな意匠を伴って描き出す美しい「ファム・ファタール」の姿を、やや複雑な心境で見つめてしまうのである。

そしてまた、当時の時代背景を考えてみるならば、クリムトがそこに込めたメッセージも受け取ることができるだろう。「ファム・ファタール」が描かれた世紀末のウィーンでは、表面上は理性が重んじられていながら、その裏ではアルトゥール・シュニッツラーの小説に見られるような官能的なものが色濃く存在していた。クリムトが描いた女性像もその時代を映し出している。《音楽Ⅱ》のキターラが奏でる音楽は、そのように表面上抑圧された本能の力を呼び起こすものでもあった。女性の挑発的とも取れる眼差しには、欺瞞的な当時の上流階級の人々への問いかけも含まれていたといえそうである。

変化する女性像

渡辺幾春の描いた《若き女》から《蓄音機》への女性像の変化は、大正から昭和へと移り変わる時代の大きな変化を背景としたものだった。そして《音楽Ⅰ》から《音楽Ⅱ》への変化は、クリムトという一人の画家の中にある二つの異なった女性のイメージを表すものであり、そこにはやはり、その時代のもつ独特の雰囲気が反映されている。そして、画面からはそれぞれ異なった音楽が聴こえてくる。

四人の女性像を見てきたが、最初の《蓄音機》に描き出された女性像と最後の《音楽Ⅱ》に描き出された女性像とは、何と大きく異なっていることだろう。女性のイメージがいかに幅広いものであるのかが、感じられる。これらは全て、男性の眼から見た女性像であるが、そこには、男性の理想、好ましい女性像が反映されている部分もあるだろう。また、男性から見た恐ろしい女性像が反映されている部分もある。時代の変遷に伴って一般的に好ましいとされる女性像にも変化が現れる。そして、魅力的な女性像というものもまた、変化する。洋服や髪型の流行が次々と変化するように、その時代を象徴する女性の姿も変わっていく。女性像は鏡のようにそれぞれの時代を映し出すのであり、女性像の変遷は、人が常に時代を背負い、時代とともに生きていることも語っている。

美しく品格のある女性を描き出した渡辺幾春と、女性の多面性を表現したグスタフ・クリムト。日本画と油彩画、日本と西洋と、使用する素材や身を置く環境の違いはあるものの、二人の画家は、どちらも女性というものを見据え、女性を描くことにその画業を賭けた画家といえるだろう。彼らの生み出した女性像は、今なお新鮮である。時代という背景を背負いながらも、時代を超えて私たちに訴えかけてくる女性像なのである。(akko)

展覧会の舞台裏

カタログ 8

今回はカタログの値段についてお話ししたいと思います。以前にもこの欄で触れた事がありますが、日本では展覧会入場者のおよそ１割がカタログを購入します。これはおおよその目安ですから、もちろん展覧会によって数字はかなり上下しますが、主催者側はこの計算式を一応の参考にして印刷するカタログの数を決めていきます。入場者数が期待できず、印刷部数1000部(もしくはそれ以下)というようなカタログもあれば、反対にゴッホやピカソなど、入場者が数十万人は固いという展覧会であれば初版２万部などということもあり得ます。資本主義の原理からいえば、大量に生産できるものはそれだけ単価が下がるはずで、印刷部数1000部のカタログより２万部のカタログの方が、同じ仕様であれば相当に単価が安くなるはずですが、実際にはそんなことは起こりません。日本の展覧会カタログの単価は、現在2000円から2500円あたりにほとんどが収まっています。売り手、買い手ともにそのあたりを標準価格と考えているわけですね。500部しか売れそうにないから4000円の値付けをする、ということがないかわりに、２万部売れても2000円ですというわけです。売れっ子小説家が初版30万部を刷っても、単価が500円にはならないのと同じ理屈です。CDでも映画の料金でも皆同じですね。それでは、海外の美術館ではどうでしょう。現在ロンドンのテート・モダンでは「ダリと映画」という充実した展覧会が開かれていますが、このカタログ(224ページ)は何と35ポンド(約8400円)。大西洋を挟んだニューヨーク近代美術館ではリチャード・セラの回顧展が開かれていますが、このカタログ(420ページ)は75ドル(約9000円)。いずれもハードカバーの立派な装丁ではありますが、それにしても日本のカタログの単価との開きには驚かざるを得ません。他にも最近の欧米のカタログの値段をいくつか調べてみましたが、仕様にかかわらず概ね５～６千円から１万円近くというのが相場のようです。欧米の展覧会でカタログがどれぐらいの割合で売れるのかは分かりませんが、恐らくこの値段の付け方は日本とそれほど変わらないと思われます。つまり、印刷部数にかかわらず欧米での展覧会カタログは７～８千円程度のもの、という共通認識ができあがっているのでしょう。欧米の美術館は昨今入場料も上がっており、2000円程度というのが相場になっています。展覧会を見てカタログを購入すると、ざっと１万円がかかる計算になります。日本では両方で３～４千円といったところでしょう。この差は何を意味するのか？　あまり軽々な判断をすべきではないかも知れませんが、これは美術に対する日本と欧米との考え方の違いが根底にあるのでは、という気が私はします。不特定多数の大衆によって支えられる日本に対して、一部知的エリート(とそのエピゴーネン)に占有される欧米。この差が両者の価格差となって現れているのではないかと。まあしかし、最近は日本も格差社会とやらになりつつあるようですから、そのうち5000円のカタログも珍しくなくなる日が来るやも知れません。(F)

感想ノートから

ダ リ 展

2007年５月12日㈯～７月11日㈬

５月12日から７月11日にかけて開催されたダリ展は、14万人を超える大勢の来館者をお迎えしました。入館者数が多ければ当然感想を残される方も多くなるわけですが、今回の感想ノートは実に８冊！　ひょっとしたらこれは過去最高！　皆さん実に様々な感想を寄せていただきましたが、個々の感想をご紹介する前に全体的な特徴を一つお伝えしておきましょう。今回のノート、何といっても外国語による記述が飛び抜けて目立っていました。英語は言うに及ばず、スペイン語、フランス語、その他何語か判読できないものまで実に多数。これだけ各国語で記述された感想ノートは初めてです。実際会場を覗くたびに、必ずと言っていいほど外国の方々の姿を目にしました。何故にこれほど多くの外国の方々がダリ展をご覧になったのか、いまだに謎です。20万人、30万人を超える展覧会でも、これほど大勢の外国の方を目にしたことはありません。それはともかく、ノートに寄せる感想の多さは、見たら何かを言わずにはおれない、というダリの作品の特徴にもつながっています。「何を考えているのだろう？」「頭の中がどうなっているのだろう？」。ダリの絵の不思議さを率直に述べた言葉は、ノートのいたるところに見ることができました。あるいは「ダリは何となく見ていると不安な気持ちになる絵が多いので、苦手だと思っていましたが、今日来てみて食わず嫌いだったと知りました。(中略)展示室に入ったらゾクゾクしました」と、本物を見てダリに対する認識を変えた方もいらっしゃいます。さらには、ダリの事を何も知らなかったのに、いつの間にか美術館に来てしまい「全て見終わった後には直感的に画集を購入してしまいました。とにかく素晴らしかった」と運命の出会いをされた方もいるようです。もちろん一方でお叱りの言葉も多数ちょうだいしました。最も多かったのは会場の混雑に対する不満と、キャプションの文字の読みにくさへの指摘です。いずれも他の展覧会でもしばしばご指摘をいただく点ですが、今回は展示方法とも相まって特に不満を感じられる方が多かったようです。反省点として、次回以降の展示でなんとか少しでも改善していきたいと思います。(F)

展覧会 現在進行形

北 斎 展

2008年２月９日㈯～３月23日㈰

葛飾北斎(1760－1849)は、おそらく世界で最も有名な日本人でしょう。しかし、日本では、《赤富士》の作家であることのほか、何度も引っ越しをしたとか、名前を何度も変えたなど、北斎の奇人変人ぶりが強調されることが多いようです。

しかし、北斎の芸術は世界の人々を魅了してきました。作曲家ドビュッシーは交響詩《海》を作曲するのに、《冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏》から想を得ています。画家ゴッホは、弟あての手紙で北斎にたびたび言及し、絶賛を惜しみません。アメリカのライフ誌が1999年に選定した「Life's 100 most important people of the second millennium」(この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人)では、北斎は日本人としてただひとり選ばれているのです。

北斎の生きた江戸時代、外国への公式な窓口は長崎の出島でした。そこのオランダ商館長が母国に持ち帰った日本の資料のなかに、日本の風物を描く水彩画があり、現在、オランダのライデンにある国立民族学博物館とパリのフランス国立図書館に所蔵されています。明らかに北斎系のこれらの作品に関し、研究者の間では、北斎その人の関わりが議論されてきています。

今回の展覧会は、商館長が依頼して描かせたこれらの肉筆風俗画を、初めて一同に里帰りさせ、つぶさな検証を試みます。また、この風俗画制作に関わったシーボルトと北斎の関係にも迫ります。

本展は、このような《知らない北斎》を紹介するとともに、馴染みの深い作品《知ってる北斎》を中心に、北斎の豊かな芸術世界を展望できる作品群も紹介します。富嶽三十六景などの有名なシリーズはもとより、北斎が一生を通じて手がけていた肉筆画や各種版本も紹介します。肉筆画では、非常に珍しい屏風作品や、初公開作品、60年ぶりの再発見作品なども含まれ、版本では、有名な《漫画》以外にも、北斎の表現の実験場のようであった読本挿絵も紹介します。

北斎の奔放で豊かな芸術世界をお楽しみいただけるよう、準備をすすめています。(hhk)

どこがおもしろい?!

今回は北脇昇(1901－1951)の《春に合掌す》(1942年)をご紹介します。名古屋市美術館では同作家による《鳥獣曼荼羅》、《浄火習作》(ともに1938年)を所蔵していますが、この作品は平成18年度に新たに収集したものです。

《春に合掌す》は、北脇が具象的なイメージと幾何学的な図形とを組み合わせた独自の表現形式である「図式絵画」を手がけるようになってからの作品です。画面右には仏像が写実的に、足元に行くほど淡く描かれ、その姿をうっすらと水面に映しています。画面左から中央にかけて、遠景には新しい緑が芽生えはじめたなだらかな山、手前には青く茂った木々が広がり、その真ん中には桜と思われる白い花をつけた丸い樹形の木が覗いています。その左隣には葉をつけない丈高な木が屹立し、そのシルエットが仏像とのダブルイメージを作り出しています。北脇が画中に描くモチーフは必ず自分の目で観察したものであることが過去の研究から分かっており、仏像は東大寺法華堂の月光菩薩像と推測されますが、風景がどの場所であるかは現時点では分かっていません。

さて、この作品を来館者の皆さんはどのようにご覧になったのでしょうか。

「全体がぼやけていて、ゆきがふっているなかに、すこし春もみえはじめたようなかんじだと思いました。山の中にはさくら？のさいた木もあって、冬が春に変わるしゅんかんをかいたえだと思いました。右の仏ぞうは早く春になるようにいのっているといういみだと思いました。」(ハリネズミさん、？歳)

「私は、この絵がまだ春ではないと感じました。厳しい冬を無事に過ごし、暖かな春を迎えられるように手をあわせて祈っているような気がしました。ぼんやりと遠い春を想っているような…・かつて住んだ富山の遅い春を思い出しました。」(Variettaさん、？歳)

北脇昇《春に合掌す》1942年

「日本画で描かれたようなのに、油画というところ。色合いもタッチもモチーフも日本画的だし、作者も日本の方なのでそうかと思いつつプレートを見たらちがったのでおどろいた。画材っておもしろいなぁー。」

(☺マークさん、20歳)

「山と木々の境にある木が文字に見えるのはなんででしょう？どう見えます？」

(R.Yさん、13歳)

「山の中(？)に、一本だけある桜の木が、仏像よりも目立って見えた。仏像と桜、どちらをメインにして見るかで、絵がぜんぜんちがって見えた。」(M.Sさん、13歳)

「私には、釈迦様が水面に立っていて、その後ろの景色が『目』のようにも見えます。また、木や花、山などが釈迦様の弟子にも見えます。」(ぷーサン、13歳)

「左の高い木と仏様の立像が構図的に対比されているのでしょうか。絵全体から安定した雰囲気を感じます。左半分は(西洋的とも日本的ともつきませんが)風景画、右には仏像の絵、その２つが１つの画中におさまっていることがこの絵の一番のおもしろい所ではないでしょうか？全体的な春霞のにおってくるような雰囲気、仏様の“ありがたい”感じに思わず“合掌”したくなってしまいます…」(ロヒロヒさん、30歳)

「私はこの絵を見て違和感を覚えました。全体のシルエットは統一されているのですが、風景画と仏画の２つの作品が共存している。別々の作品がくっついていると感じました。２つの画として完成させてもいいのではないでしょうか。」(S.Hさん、36歳)

「眼に映る外の世界の絵ではなくて、眼の裏の何処かしらの風景。」(F.Oさん、21歳)

「この絵を見て感じたことは、仏は見るものでは無く、心に有るものである。仏さまの合掌する手がびみょうにずれ、仏さまでも完璧ではないと言いたいのか？全体的にはほのぼのとした心のあり方を言いたいような…」(Kimさん、43歳)

「左側の風景は、仏像が見つめている風景のような気がします。桜の木の、春の訪れに、合掌する仏像の姿がそっと寄りそっていくようなイメージです。仏像の中に“人”らしさというか、個としての意識を感じます。おがまれる対象としての仏像としてではなく、季節の移りかわりに感動し合掌する人の中の一人に見えます。私たちがありがたいと思って手を合わせる仏像も、実は“自然”に対して手を合わせているのかもしれないなと思いました。」(可世子さん、21歳)

この他、時代背景との関係を指摘した意見などもありました。今回も多くの方にご協力いただき、ありがとうございました。(3)

美術館Q&A

常設展に展示する作品は、どうやって決めているのですか？　いつもあるものもあるし、はじめて見るものもある。

「美術館とは、どういうところですか？」と尋ねられて、ほとんどの皆さんは「展覧会を見に行くところ」と答えるのではないかと思います。ところが、展覧会には「特別展」と「常設展」の２種類があると言われて、意外に思う方も多いのではないでしょうか。

特別展とは、英語で表現すると”Temporary Exhibition”、直訳すると「一時的な展覧会」ということになります。ある企画(時代や分野、作家やテーマなど)によって作品を選定して、美術館や個人所蔵家などから借用して、「一時的に」展示する展覧会のことです。展覧会と言えば、ほとんどの皆さんは特別展を想像すると思います。

それに対して、常設展とは、英語では”Permanent Collection”、直訳すると「永久的なコレクション」ということになります。その美術館のコレクションを「常設的に」展示する展覧会ということになります。残念なことに、日本では、特別展で来館した方の多くが、常設展は「いつも同じで詰まらないから」と見ないで帰られます。

しかし、美術館とは本来、コレクションを展示するために誕生したのです。ウフィツィ美術館、ルーヴル美術館、オルセー美術館、メトロポリタン美術館など、世界の主要な美術館はすべて常設展を中心に活動を展開しています。

さて、それでは世界の美術館において、なぜ常設展が主役なのでしょうか。

美術作品というのは一度見ただけで理解できるような単純なものではありません。私たち学芸員でも理解できない作品はたくさんあります。たとえ理解しているといっても、作品にはまだまだ奥深くに秘密が隠されているのです。何度も繰り返し見れば見るほど、それまで見えていなかったものが見えてくるのです。

また、若い頃に理解できなかった作品が、人生経験を積み重ねるうちに理解できたような場合、それが何を意味するかというと、美術作品は変わることはありませんので、見ている皆さんが変わった(成長・成熟した)ということになります。

このように美術鑑賞とは、美術作品と「付合う」ことで深まっていくのです。

実は、こうした美術鑑賞ができるのは、特別展ではなく常設展なのです。特別展には、美術作品との「出会い」の感動はありますが、常設展には、コレクションとの「付合い」の楽しさがあるのです。

したがって、常設展には、まず基本的に、その美術館のコレクションの代表作が展示されています。名古屋市美術館の場合には、モディリアーニの《おさげ髪の少女》やシャガールの《二重肖像》、リベラの壁画《プロレタリアの団結》やカーロの《死の仮面を被った少女》、キーファーの《シベリアの王女》などの作品が「いつもあるもの」になります。その代表作を中心にして、学芸員が多彩なテーマを設定して、年間に３～４回の展示替えを行って、コレクション(3,000点以上)のなかから選定した作品を順次展示しています。そのために「はじめて見るもの」もあるのです。(sy)

＊この質問をお寄せいただいた岐阜市のT･Uさんには「河口龍夫―見えないものと見えるもの―」展の招待券をお送りします。

郷土の作家たち

水谷芳年(みずたにほうねん／1879－1928)

明治12(1879)年生、昭和３(1928)年没。生没地は名古屋市。本名、勝挙。

はじめ中島有年、ついで石河有粼に学ぶ。ともに花鳥を得意とする。有粼は鳥の描写にすぐれ、多くの門人を育成した。芳年は、江戸後期に京都を中心に活躍し、晩年、生地の尾張藩で御絵事格となった山本梅逸を研究した。梅逸もまた、艶麗な花鳥画で知られる。

芳年は花鳥画、とくに孔雀を得意とし、一度に孔雀百種を描いたこともあったという。当館所蔵の《花鳥図屏風》は、一見して物足りなさを感じるほどあっさりした印象を与えるが、極楽鳥の精緻な写実と菩提樹の描線を活かしたおおらかな描写は、花鳥を得意とした力量を窺わせる。

明治32(1899)年の第７回連合絵画共進会に《秋池遊鴨》を、翌、明治33(1900)年の第８回連合絵画共進会に《秋園鸚鵡》を出品。連合絵画共進会は、日本絵画協会共進会が第５回より日本美術院展と連合したもので、明治36(1903)年の第15回で休止した。

明治43(1910)年、名古屋開府300年を記念して愛知県商品陳列館で開催された新古美術展覧会に出品。同館は大須門前町にあった愛知県博物館の跡地に同年完成した。新古美術展覧会は、同年、財界の後ろ盾により東海美術協会へと発展し、芳年も会員となる。東海美術協会はこの地方を拠点として活躍する日本画と洋画のおもだった作家を会員とし、昭和４(1929)年の解散まで権威した。

東海美術協会は文部省美術展覧会(文展)にこの地方からより多くの入選者を出すことを期してもいたが、芳年は大正元(1912)年の第６回展に《閑庭秋色図》が入選した。

大正13(1924)年、日本画の革新を求めて、当地の若手日本画家が中京美術院を結成する。そのひとり渡辺幾春は、幼少から芳年に学んでいる。《花鳥図屏風》のふくよかな清明さは、日本画の新旧の橋渡しに芳年が位置したことを教える。(み。)

水谷芳年《花鳥図屏風》1920年代

嶋谷自然(しまやしぜん／1904－1993)

三重県鳥羽市に生まれる。地元の画家で、宇田荻邨の師でもある中村左洲に師事したのち、18歳で東京に出て、矢沢弦月に学ぶ。23歳の時、京都に出て、帝展に出品をはじめ、1929年(25歳)、帝展に《網小屋》が初入選する。27歳で名古屋に戻ってから、京都で活躍していた日本画家西山翠嶂にあらためて師事。太平洋戦争末期には、伊勢に疎開し、終戦と共に名古屋に戻ったが、戦後、1947年から５年間、知多半島の佐布里(現知多市佐布里)に住む。

帝展を継承して1946年に行われた第一回日展には、すでに「冬日」が入選していたが、1951年の第六回日展には「緑影」が特選を受賞する。ここで用いた粒子の粗い緑青は、その後の嶋谷の画風のもととなるものであった。孔雀石(マラカイト)という美しい鉱物を砕いてつくられるこの緑青を、粗いまま使うことにより、ざらっとしながらなめらかな嶋谷独自の絵肌(マチエール)を生み出すことになったのである。

日展で特選を得た年、高山辰雄を中心にした日本画研究グループの「一采会」に参加する。また、1955年(51歳)には、日展の審査員となる。その後日展を舞台に活動を続け、日展でのポジションも次第にあがっていく。1963年名古屋で中部日本画会をつくって日本画の研究を始め、また1970年に名古屋芸術大学が開設されると教授として迎えられ、後進の指導にも積極的に当たった。1979年の第11回改組日展では《湖心》が文部大臣賞を受賞した。こうした創作活動に加え、中部画壇への貢献と後進の指導が認められ、1973年中日文化賞、1977年、愛知県表彰(文化部門)を受け、さらに1980年には、勲四等瑞宝賞を受賞した。

簡潔な形態と暖かみのある色彩で、生涯、風景のみを描き続けた嶋谷は、日本画が大変革を遂げる中にあって、伝統的な日本の美意識を大切にしながら、従来にないマチエールを生み出していく。純然たる日本画家のように見えながらも、新しい日本画を意識しつつ活動していたといえるであろう。(hhk)

嶋谷自然《湖心》1979年

展評

2007年７月28日(土)～９月15日(土)
ケンジタキギャラリー（名古屋）

手塚愛子展

岡崎市美術博物館の「『森』としての絵画」展（2007年２月10日～３月25日）での作品が印象的だった、手塚愛子氏の個展が開催されました。

今回の個展に出品された新作のひとつが《縦糸を引き抜く（傷と網目）》（写真）です。作品のベースとなるのは、幅1.45m、長さ10m、花束を中心とした植物の文様を５色の縦糸と３色の横糸で織り込んだ布です。中央から左右に広げられた布は、ギャラリーの白壁いっぱいに張りつけられ、余った両端の布は柱に沿いながら床へ垂れ下がり、軽く折り畳まれています。カーテンを開いた窓、あるいは幕の開いた劇場を暗示するかのような趣です。

この布から現れてまっすぐに垂れ下がる赤い筋は、布の左端から約5.5mの長さまで、一本一本引き抜かれた赤い縦糸です。数百本の糸が引き抜かれている際（きわ）は斜線となって、そこからタイトルにある「傷」のイメージと、そこから流れ出る血液や血管のイメージが浮かんできます。赤い糸はさらに床上で縮れ、這うように拡がり、そのありさまは水面や女性の髪を連想させます。

赤糸という“画素”を失った布地からは、予想外にも青い花柄が浮かび上がり、抑制された色調の心地よさを新たに感じさせます。また、引き抜かれた糸そのものも、赤というよりも実際はピンクに近いヴィヴィッドな発色で、一見アンティーク調の落ち着いた色あいの織物からこのような色が現れるとは予測のつかないものでした。一部の縦糸を引き抜くというシンプルな工程にもかかわらず、その結果の布の変容ぶりには、思っていた以上の驚きがあるといっていいでしょう。

織物を解体した手塚さんの一連の作品の魅力は、花柄という二次元のイメージがゆるやかに変調していくありさまとともに、引き出された糸が新たな量として存在感をみせつけ、イメージではなく実体として別の主張をはじめるところにあります。今回の作品で気になったのは、引き出された糸が、これまでの作品のように束ねられることなく、床の上に拡がり、観る者に迫ってくるような印象を与えていた点です。この織物がアンティークでも職人の手によって紡がれたものでもない、機械織りの製品であることを考えると、けばけばしい化学繊維の素材感が前面に押し出された状態で留められることによって、その出自を隠蔽している巧妙さが揶揄されているようにも思えます。

現在、愛知県美術館で開催されている「サイクルとリサイクル」展（2007年９月７日～11月４日）に、手塚氏の大作《薄い膜、地下の森》が出品されています。（nori）

《縦糸を引き抜く（傷と網目）》2007年

展評

2007年３月17日(土)～８月19日(日)
名古屋ボストン美術館

「アメリカ絵画　子どもの世界」

子どもというと、一般的には、純真無垢で可愛らしいというイメージがあるかと思いますが、この展覧会は、そのイメージがどの時代にも共通しているわけではない、という認識を与えるものです。会場に入ってすぐ、そのことは感じられます。解説パネルを見ると、17世紀には、子どもというものは「罪深い」ものとされていた、と説明されていますが、実際その頃に描かれた作品を見てみるならば、大人から「罪深い」ものとして見られている子どもの姿が、窮屈そうに、固まったような表情を伴って描かれています。現代の視点で子どもを見ている私たちにとって、そのような子どもの姿を見ることは、あまり気持ちの良いものではありません。だんだん時代が下ると、子どもが子どもらしく、伸び伸びと描かれるようになります。大人たちは子どもを、愛情をたっぷりと注ぐべき存在として認識し始めるのです。そのような子どもの姿は、私たちをほっとさせます。

そして、この展覧会で一際目を引いた作品が、ジョン・シンガー・サージェントの《エドワード・ダーリー・ボイトの娘たち》と題された大作です。そこには室内に居る四人の少女たちが描かれますが、少女たちは皆どこか大人びた表情をしています。彼女たち一人ひとりが複雑な感情や思いを内に秘めた一個の人間であることが感じられるのです。

この展覧会では、17世紀から20世紀までの画家が描いた子どもの姿を見ることができますが、それぞれの時代の作品を見ていく中で、子どもというものが、決して社会の状況と無縁ではあり得ないということをしみじみと感じさせてくれます。

展覧会を見ながら自然と現在の子どもの状況にも考えが及びますが、凶悪犯罪に巻き込まれたり、学校で陰湿ないじめに会ったり、海の向こうでは兵士として戦う子どもがいたりと、現代は子ども受難の時代のようにも思えます。社会と無縁ではあり得ない子どもの姿を見る時、私たちは、子どもが幸せに伸び伸びと暮らせる社会を作っていく責任があると感じさせられました。（akko）

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

映画「魔笛」

ケネス・ブラナー監督
2006年イギリス映画、139分

愛こそすべて!?

８月は憂鬱な季節です。この原稿の締め切りが８月15日で、戦争を思い出さなければならない記念日が続いて、それに関する様々なメディアでの報道に触れるたびに、戦争について、そして、現在と未来の平和について考えずにはいられなくなるからです。そして、それを考えることによって62年前の戦争から学んだ筈の私たちが、二度と戦争という悲劇を繰り返さないということを達成していないことにも気付かされるからです。場所や理由や手段が少し変化しただけで、世界中で同じような悲劇を繰り返していることに気付いて、一体、私にできることは何もないのではないかと、猛暑の中、どうも意気消沈してしまうのです。

ところで、先日、あのモーツアルトが生涯で最後に完成させたオペラ《魔笛》を映画で再現したと聞き、早速見に行きました。《魔笛》は、当時はウィーンでもイタリア語だったオペラを一般市民が理解できるようにドイツ語で書かれ、ユーモアたっぷりで親しみやすく、リズミカルで心躍るメロディーとうっとりさせられるアリアだけでも、言葉や文化の壁など感じる間もなく楽しめます。オペラを映画化するからには、よりたくさんの人に親しんでもらいたい、最高の録音で記録に残したい、そして何よりも、映像でしかできない演出をこのファンタジックな物語で実現させたかったのでしょうか。ストーリー展開に、夜の女王と高僧ザラストロの、正義と悪のどんでん返しというスリリングさを持ち、俗っぽくもありながら崇高な「愛」がテーマなので、時代や文化を超えていかようにも調理できそうです。しかも、オペラ界きっての美声の持ち主を起用し、演出する側も腕が鳴ったにちがいありません。

映画で再現された《魔笛》は、舞台のような臨場感や余韻がないことによるあっさり感はありますが、人間がふっとぶなど、CGを駆使した、映像でしか実現できない美しい表現と秀逸な音楽によって十分楽しめるものでした。そしてなによりも驚かされるのは、あのファンタジックな世界が第一次世界大戦を舞台に再現され、王子タミーノと鳥刺し男パパゲーノが兵士として登場するのです。彼等のパミーナやパパゲーナとの愛をはばむものは、戦争、人を憎み、復讐する心。戦争犠牲者の共同墓地には世界中の人々の名前が刻まれ、アラビア語、日本語で書かれた名前も目に付きます。例え「愛こそすべて」がきれい事に聞こえたとしても、「かわいい彼女がいれば幸せ！」と歌うパパゲーノの気持ちは誰にでも理解できます。モーツアルトの音楽とともに、この映画に込められたメッセージは、愛の幸せをいとも簡単に壊してしまうすべての暴力とその原因となる復讐の心をなくしたいということ。私たちにできること、まずは、愛することからはじめてみましょうか。（hina）

イベントレビュー

「ダリ展記念　鶴田真由　トークショー」

５月27日(日)

美術館での講演会といえば、大学教授や学芸員、あるいは作家自身など、その道の専門家による固いお話しというのが相場ですが、時には趣向を変えて、全く違うジャンルの方に登場していただくこともあります。５月から７月にかけて開催したダリ展では、女優の鶴田真由さんをお迎えして、ダリだけではなく、美術全般についての様々な思いをお聞きすることができました。当館ではこれまでにも真野響子さんや星野知子さんなど、美術に造詣の深い女優さんをお招きしてお話しを伺う機会がありましたが、鶴田さんの場合は大学で西洋美術史を専攻されており、加えて現代美術作家の中山ダイスケさんがご主人でいらっしゃるということもあって、そのお話しは単なる美術愛好家という枠を超えて、ひと味違った面白さにあふれていました。１時間あまりのお話しの中で、いくつもの心に残る言葉がありましたが、対談相手の私に一番強く印象に残ったのは「理屈ではなく、とにかく感じさせて欲しい」という鶴田さんの美術に対する明確なスタンスでした。言葉による説明があって初めて理解できる美術作品がある、ということは分かるが、自分が求めているのは感性にストレートに訴えかけてくれるもの、という鶴田さんの潔いまでの言葉は、私だけでなく多くの方々に新鮮に響いたことと思います。同時にテレビや映画で見る鶴田さんのたおやかなイメージと、このきっぱりとした発言との間にある種のギャップを感じられた方もいたでしょう。講演の最後には「ダリは知的な確信犯」という、卓抜なキャッチフレーズも飛び出し、さらには夫君の中山ダイスケさんの宣伝まで加わって、女優として、美術愛好家として、そして作家の妻として、鶴田さんの様々な顔を見せてくれる講演会となりました。（F）

イベントガイド

■特別展「河口龍夫―見えないものと見えるもの―」

11/3（土・祝）～12/24（月・祝）

河口龍夫氏は種子や化石、銅や鉛といった素材を用いて、時の作用やエネルギーの伝導など、普段は隠れている事物の本質や可能性、そして目に見えない「関係」を表現する美術家です。本展は、兵庫県立美術館と二館同時開催というかつてない規模で、河口氏の代表作と新作を紹介します。

講演会「自作を語る」11/3（土・祝）14:00～
講師：河口龍夫氏（美術家）　申込不要・無料・先着180名

対談　河口龍夫氏×北川フラム氏（アート・ディレクター）12/1（土）14:00～
司会：竹葉丈（当館学芸員）　申込不要・無料・先着180名

学芸員による解説会
①11/25（日）14:00～　②12/9（日）14:00～
①コレクション解析学　「青の背後に」　講師：保崎裕徳（当館学芸員）
＊当館所蔵の河口氏の作品《関係―質》について解説します。
②展覧会解説　講師：竹葉丈　①②とも申込不要・無料・先着180名

ワークショップ「世界にひとつしかない種をつくろう！」　11/23（金・祝）10:30～15:30
講師：河口龍夫氏　対象：小学３～中学３年生　定員：30名　参加費：500円
申込方法：往復はがきに以下の事項を記入し、当館「河口龍夫展 ワークショップ」係まで。申込多数の場合は抽選。締切は11月9日（金）必着。
往信・裏面　①郵便番号と住所、②氏名（ふりがな）、③学年、④電話番号
返信・表面　郵便番号と住所、氏名
返信・裏面は空白のまま郵送ください。

■常設企画展「河口龍夫展《関係―質》」

11/3（土・祝）～12/24（月・祝）

特別展の一端として、布に銅や鉄を包み込み、液体をしみこませて錆を発生させた、河口氏の代表的な作品《関係―質》のシリーズ17点を特集します。

■フライデー・ナイト・シアター

10/12（金）、11/9（金）、12/14（金）18:00～

毎月第二金曜日の夜間開館時に開催。アート・ドキュメンタリーなどを上映します。作品は決定次第ホームページでご案内します。　申込不要・無料・先着180名

＊名古屋市美術館は、12/25（火）～1/4（金）の期間、休館します。

■美術館の「キッズの日」+「おとなの日」

●ぬけだし探偵団　11/18（日）10:00～12:00
美術館をぬけだして、外にある彫刻を探して見にいくプログラムです。
対象：小学生　参加費：100円　定員：30名
申込〆切：10/31（水）

●アート・ウォッチング
12/22(土) 10:00～12:00
家族や友達といっしょに美術館にある絵や彫刻を見てまわるプログラムです。絵を見てクイズやゲームをしたり、彫刻をまねして作ったり、ちょっとした遊びをしながら美術の面白さを発見します。
対象：こども（小中学生）とおとな（保護者）とのグループ　参加費：こども（小中学生）100円　おとな（高校生以上）400円　定員：10組
申込〆切：11/30（金）

●なりきりアーティスト
1/19（土）10:00～12:00
アーティストが作品をつくるときのアイデアやくふうを考えて、自分も作品を「つくって」たのしむプログラムです。
対象：小学生　参加費：400円　定員：30名
申込〆切：12/31（月）

★申込方法
官製はがきに①住所、②参加者（グループは全員）の氏名（ふりがな）、③こどもの学年（さしつかえなければ年齢も）、④電話番号、⑤希望のプログラム名と日時を記入し、名古屋市美術館「キッズの日」係まで申込みください。はがき１枚で１プログラム1名（または１グループ）の申込みとさせていただきます。申込みが多いときは抽選し、当選の方にはプログラム実施日の10日前までに参加証をお送りします。詳しくはホームページをご覧ください。

●特別イベント　「宮田篤のびじゅつ感ワークショップ」10/14（日）10:00～17:00
みんなであそぼう！　ワークショップリーダー：宮田篤　ゲスト：山中カメラ
申込不要・無料　どなたでも参加できます。
＊10/14（日）は「なごや祭り」のため、常設展観覧料が無料になります。

【編集後記】

これを書いている現在、名古屋はまさに「うだるような暑さ」。名古屋のみならず、日本列島全体がものすごい暑さで、昨日は、多治見と熊谷で40.9度という気温が記録されました。しかし今号が発行される頃には涼しい秋風が吹いていることでしょう。昨今は夏の暑さの中、冷房なしでは過ごすことができなくなりつつありますが、各家庭やオフィスの冷房によって戸外の熱気がすさまじいものになっていることを考えると、なんだか、人間ってバカみたいだなあ、と思ってしまったりします。（と言いつつ、私も冷房の恩恵に預かっているのですが……。）それにしても、夏になると必ず考えさせられる人間の最大の愚行が、戦争ですね。夏とはいえ、楽しいバカンスのことばかり考えていられないのが現状。どうすれば戦争のない世の中になるか、諦めずに考えていきたいですね。（akko）

アートペーパー第75号 発行日：2007年10月1日
発行 名古屋市美術館［白川公園内］
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜（祝日の場合は翌日）
Nagoya City Art Museum

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用しています。

執筆者／神谷浩（hhk）、深谷克典（F）、山田諭（sy）、竹葉丈（J.T.）、角田美奈子（み。）、原沢暁子（akko）、笠木日南子（hina）、清家三智（3）、保崎裕徳（nori）